

入声韻尾の研究——いわゆる新漢音と閩南系方言との関係

黄本元

目次

- 一、いわゆる新漢音及びその語音的特色
- 二、閩南系方言の -p、-t、-k、-ʔ 入声韻尾は、もとより共存する——従来の研究への検討
- 三、閩南系方言の -p、-t、-k、-ʔ 入声韻尾の共存する状態は、いつごろ移入されたものか
- 四、結論

一、いわゆる新漢音及びその語音的特色

新漢音とは、唐末五代に、入唐した天台宗、真言宗の留学僧（慈覚大師等）によって、当時の中国北方（或いは西北方）の方言音が、諷經（主として、法華經安樂行品『法華懺法』、阿弥陀經『例時作法』）を経て、日本に伝承された漢字の音である。慈覚大師円仁が、新漢音を習得した事情は、彼の旅行記『入唐求法巡礼行記』に特に詳しい。その他、智証大師（円珍）の『行歷抄』、成尋の『參天台五台山記』なども参考になる。①

新漢音の語音的特色として、次の三種類があげられる。

1、入声韻尾を脱落させる例もあるが、完全に脱落するのもあり、混乱するのもあり、正確に中国当時の北方（或いは、西北方）音を

反映するものもある。

2、「蒸、青、清」などの合流と、「職、錫、昔」などの合流を反映するもの。②

3、声調には、6声調か8声調かを反映するもの。③

もちろん、新漢音の語音的特色は、この三つしかないとは言えない。そのほか、鼻音韻尾も、非常に特色が見られ、漢音のように、「ウ」として反映しないで、それを脱落するか、「イ」になるかのよう反映している。（例字は、奥村三雄氏『日本漢字音の体系』を参照）。又、漢字の音節構造から分析して見れば、声母、介母、核母音、韻尾、声調などがある。故に、新漢音の語音的特色、すなわち、中国原音を反映する新漢音の語音的特色には、前に述べた五つがあげられるはずだが、この点に関しては、将来の研究を待たざ

るを得ない。

二、閩南系方言の -p、-t、-k、-ʔ 入声韻尾は、もとより共存する従来の研究への検討

従来の研究と言うと、陳子博氏『台灣閩南語の研究—日本漢字音研究への展開—』と、有坂秀世氏『入声韻尾消失の過程』と、両氏の研究である。

陳氏が、前掲論文の中で、

台灣閩南語における韻尾区別の混乱が、新漢音の「表記の混乱」ときわめて良く似た状態を呈することは、その根拠を確かなものとする上で、甚だ重要な意味を持つものである。というのも、両者の符節を合わせたような姿は、偶然の所産とは見なし難く、明らかに、或る共通の音韻的事実を背景に持つものと考えられるからである。

と台灣閩南語と新漢音との音韻的共通点を述べた。又、

有坂博士は、それについて、次の如き考え方を示しておられる——(新漢音の伝来当時、中国中央語に)入声韻尾の三内の別は勿論厳存したが、その響は、余程微弱なものであり、……大体に於てやはり現代の台灣音に於ける状態に近いものではなかったらうかと思われる。▽

と言う有坂氏の研究をもとにして、次のような結論をくだした。

つまり、新漢音の「表記の混乱」は、「単に表記上の混乱にすぎないもの」ではなく、実質的な音韻区別の混乱を背景に持つものであり、しかも、その音韻混乱の様相は、現代の台灣閩南語に見られる如きものではなかったか。

つまり、台灣閩南語の入声韻尾の実態と新漢音の入声韻尾の実態との音韻混乱の様相は、同じような実質的な音韻区別の混乱であると述べている。

ところが、両氏の研究をもっと精密に考えれば、それについて再検討をする必要がある。まず第一に検討すべきものは、陳氏に引用される有坂氏の台灣閩南語の入声韻尾についての観察である。有坂氏は、『入声韻尾消失の過程』の中で、

……入声は短促だというから、国語の促音のやうにバツと促るのかと思つてゐたら、大いに豫期に相違してゐた。例へば、kip (急)、kat (葛)、lok (各) に於て、p、t、k と中心母音との結合状態は、決して Jespersen 氏の所謂 *fester Anschluss* ではない。どちらかと言えば、*loser Anschluss* の方に近い。もともと、*loser Anschluss* の場合には息が一度弱まつて、然る後に再び強まるのであるが台灣の入声の場合には、中心母音の終で息が一度弱まると、もはや再び強まること無く、弱まつたままで、p、t、k の閉鎖が作られるのである。故に、韻尾 p、t、k は殆ど聞えず、或は殆ど声門閉鎖音かと聴き誤られる位である。

と述べ、そして、

p、t、k の閉鎖は、勿論ごく柔かに作られる。且声帯の振動は、p、t、k の閉鎖が作られて後に始めて止む。(……) 故に、聴覚的效果から言へば、kit、kat、kok よりは、寧ろ kíp、kaq、kaqg の方に近い。更に一層詳しく言ふならば、kíp、kaq、kaqg のやうに記すべきであらう。つまり、「短促」と言つても、国語の促音などのやうに「急に止る」のではない。寧ろ「急に消える」という感じである。国語の促音の場

合には、相当に強い息が、 p 、 t 、 k の閉鎖によってパッと阻止される。然るに、台湾の入声の場合には、「阻止される」といふ気持は少しも無い。閉鎖の作られるに先立ち、呼気は既にごく微弱になつてゐるので、 p 、 t 、 k 相互の区別などは、餘程注意してゐないと聴きとれない位である。……台湾の発音でも、声門閉鎖に似て聞えるのは主に p 、 t 殊に k の場合である。但し、台湾に於ても p 、 t の代りに実際に声門閉鎖音を用ゐる場合があるのかどうか、その点は、未だよく知らない。

と述べている。が、陳氏は、それに対し不満を抱き、より詳細な調査、観察をした。

① 古代中国語における入声韻尾 -p -t -k は、台湾閩南語において各々50%前後保存されている。

② 残り50%のものは、或るいは声閉鎖音に変化し或るいは他の韻尾と混同するなどして、区別の曖昧化する様相を見せている。

③ 声門閉鎖音化の傾向が著しいのは、三者のうち、特に -k と -t とである。

④ 撰の分類に照らして言えば、咸撰の -p 、山撰の -t 、梗攝宕撰の -k に、声門閉鎖音化の傾向が著しいようである（但、 -k については、通、江、曾各撰のそれも、かなり声門閉鎖音化が進んでいると見て良い）

と言うものである。又、

結論として、台湾閩南語における入声韻尾の -p -t -k の区別は、かなり曖昧になつて来ており、徐徐に声門閉鎖音化（↓無韻尾化）する方向をたどつていゝと言えさうである。

と述べている。そして、

これは、有坂博士が上記論文（黄注：『入声韻尾消失の過程』をさす）において推定された「入声韻尾消失の過程」 \vee と、きわめて良く一致するものであり、その推定の正しさを裏づけるのに与つて力有るものと思われる。

と陳氏は述べている。

以上、繁瑣に見えるが、両氏の研究の相互關係をはつきりさせて来た。が、有坂氏による台湾閩南語の入声韻尾の発音についての観察を検討しよう。有坂氏は、台湾のこの発音に、 -p 、 -t 、 -k を持っていることに注意を払つたが、それと共存する -i 韻尾に注意を払わなかつたにすぎない。つまり、有坂氏の観察では、台湾閩南語は、現時点において、『 -p 、 -t 、 -k ↓ -i 』という傾向を持つてゐるということに限つてゐる。が、有坂の観察したのは、台湾の中部の人の発音だけである。（氏の前掲論文を参照）台湾中部の人の発音、特に入声韻尾の発音は、台湾閩南語の中で、なかなか特殊性を持つてゐるものである。つまり、「 -i 」の不安定な状態がよく見られる。その一方で、ほかの -p 、 -t 、 -k がほかのものと同じようにはつきりと厳存している。つまり、消失する道をたどつて行つて舒声化される傾向が見られるのは、この -p 、 -t 、 -k ではなく、 -i 韻尾だけである。（注③）

次に、陳氏の前掲した論文の表Ⅲにあげた台湾閩南語について検討をしよう。

木 速 屋 穀 福 六 育 沃 諾 約 逆 責 策 益

北 特 國 極 憶 ↓ -k

訥 逸 殺 滑 越 絶 滅 穴 ↓ -t

などの字は、本来 -t 、 -k を持つてゐるはずであるが、陳氏の調査では、 -i を持つてゐる。（ここでは、「本来」というと、村上嘉英編

『現代閩南語辞典』、鄭良偉著『台語與國語字音對應規律的研究』また私自身の内省、放送、友人などの発音をもとにして、発音の基準となるから、陳氏が、自分の観察では、以上のものが、-2 になっているから、有坂氏の「弱化説」を正しいと思うようになったのも、無理ではなからうが、思うに、台湾閩南語における -p、-t、-k、-2 入声韻尾の共存する状態は、従来、閩南系方言に存在している言語事実として認められているから、われわれは、この -p、-t、-k、-2 の共存する言語事実を研究していけばよいと思う（註④）。つまり、閩南系方言の母胎である古代中国語へさかのぼって、その入声韻尾を研究すればよいと思う。特に、いわゆる新漢音の言語事実を論ずるには、これと同じ時代の言語事実を持つ台湾閩南語の歴史的関係や、その当時の言語事実を論ずることから、論ずるべきではなからうか。

三、閩南系方言の -p、-t、-k、-2 入声韻尾の共存する状態は、いつごろ移入されたか

閩南系方言の入声韻尾が、いわゆる新漢音の入声韻尾と共通の音韻的事実を歴史的背景に持つか否かということは、その先決条件として、まず閩南系方言の入声韻尾の共存状態が、いつごろ、どこから移入され、また、今まで保存されて来たものであるかということである。

王育徳氏が、

実際に福建語に当つてみると、……長安方言の系統を引く文言音の……。日本漢音も長安方言の系統を引いているので、両者は、非常によく似ている。……次にそれより古い中国音を伝

えたものと思われる一部の口語音がある。……反対に新しい変化もある。文言音の -m、-n、-ng の韻尾が、口語音で鼻母音化する傾向があるのが、その顕著な一つの例である。……文言音の中でも、長安方言の系統から逸脱するものがある。（註⑤）

と述べている。長安方言より古い中国音を伝えたということは、丁邦新氏、楊秀芳両氏の前掲資料を参照して分る。が、もつとも注意を払うべきことは、「口語音で、新しい変化が見られる」ということである。丁氏、楊氏両者は、口語音を論ずるに、あげた音韻的特色が、声母の中古音を超越するとか、韻母の中古音と対照することなどにとどめているが、王氏は、それと違って、その中古的、新しい音韻的特色を抽出して論ずるのである。つまり、韻尾の -m、-n、-ng が鼻母音化する傾向があるとしていることである。その資料の中で、入声韻尾について一言もふれないが、同じ王氏著『中国の方言』一文の中で、

白話音の -N（鼻音化韻母）と -2（喉門閉塞音）は、より新しい層である。おそらく唐代に入ってから西北系移民の伝えたものであろう。（註⑥）

と入声韻尾の新しい要素 -2 について述べている。つまり、閩南系方言の「読書音」は、中古の音韻的特色を持っているが、白話音は、中古以前の音韻的特色を持つに拘らず、中古より新しいものをも持っているのである。ほかに、

中古漢語の平声、上声、去声、入声は、唐代中期以降、その都長安においては、濁音声母が、しだいに清音と合流するようになったため、次の八調類に変化するようになった。

と述べているのは、森川久次郎である。（註⑦）つまり、閩南系方言は、八調類、濁音声母が清音と合流することなども、中古よりや

や新しい特色を持っているものではないかと思う。(註⑧)
続いて、閩南地区の移民の歴史的背景から、閩南系方言を考えよう。

王氏の前掲書『台灣語概説』によると、閩地区のもっとも重要な開発期は、唐中期以後となっているのである。特に、人口の増加という点について、王氏は、隋、唐、宋三つの時代の資料をあげ、その人口をかぞえた。その結果として、天宝元年から元豊元年に至る三世紀間(七四二—一〇七八)に、実に11倍余に激増している。すなわち、閩地区にもっとも重要な影響を与えたのは、この唐中期以後から北宋の初めにかけて、という時期である。

ほかに、江文種氏が、『閩南語小考』の中で、

陳元光將軍が子弟軍(いわゆる民兵)をひきつれて福建へ渡ったことは、中国移民史の一大事実であり、また、閩南地方方言の創造から言っても頗る価値ある一大事実である。

と述べている。この中で、もっとも注意すべきことは、従来と違って、「閩南地方方言の創造」といって、閩南系方言について言っている。が、やはり、唐以後のことである。

以上移民の歴史的背景を考慮に入れて、閩地区の開発、また、言語の形成にもっとも影響力を与えたのは、唐代の中期以後から宋にかけてという時期であろうことが分る。が、これは、唐中期以前移入されたものが、すこしも閩地区に影響を与えていないというものではない。ところが、われわれは、言語というものの、すなわち閩南系方言を論ずるには、やはり、人口を一番大切な要素として見ればよいと思う。だから、閩南系方言が、いつごろ移入されたものかを論ずるには、この点をおろそかにしてはならないのである。つまりこの要素を考慮に入れて考えると、閩南系方言は、唐中期以後から

宋にかけてという時期に形成されたものである。(註⑨)移入されたあとの閩南系方言は、閩地区の特殊な地理的環境また住民の保守性から形成されたから、ほとんどそのまま(変化があっても相当少ないと言えよう)今日に伝えられ来たに違いないと思う。(註⑩)従来の福建語の成立についての諸論は、いろいろあつても、王氏は、前掲した『台灣語概説』の中で、

学者たちは、福建語の成立を唐から宋にかけて、と見ているようである。決定的な反証でも挙げない限り、われわれもその假説を信ずるよりしようがない。

と述べている。それ自体に理由があるものだと思う。

最後に、入声韻尾消失の過程から閩南系方言の移入する時期を述べよう。つまり、閩南系方言のこの-p、-t、-k、-2の共存する状態が、どの時代の性質を表わすかを追い求めなければならない。まず、従来の研究成果を見よう。これらの研究が、歴史文献資料をもとにして出された当時の西北(北方)地方の語音状態である。1、羅常培氏『唐五代西北方音』によると、五代には、釋、沒、亦、薛、履などの入声韻尾は、消失する痕跡が見られる。2、周祖謨氏『宋代汴洛語音考』によると、北宋には、入声韻尾の-t、-kが、-2になつていて-pしか残っていないことが分る。3、王力氏『漢語史稿』(増訂本)によると、黄公紹の『古今韻會』に、-pが-tに併入されて、-k、-tだけ残っている。4、陸志韋氏『釋中原音韻』によると、十四世紀の『中原音韻』(周德清)に-2しか残っていない。(註⑪)5、有坂氏の前掲論文の中で、古代朝鮮漢字音(特に、五代又は宋初頃の開封標準音)に、この-2を持っていると推定された。ほかに、7、現代の西北方言の懷慶方言、文水方言、興泉方言なども、-2を持っている。(註⑫)8、白滌洲氏が、『北音入声演變考』の中で、

『全唐詩』の作詩一首を引いて、当時すでに、入声韻尾は、混乱する状態が、見られたことを述べている。

つまり、入声韻尾消失の過程が、つぎのように想像できるであろう。

唐代 混乱の初め

五代 消失する痕跡がある

北宋 「-t、-k」或いは「-p、-2」残っている

元代 「-2」しか残っていない

現代 「-2」しか残っていない

というのは、西北地方（或いは北方）の状態である。つまり、同じ西北地方（北方）から移入された（注⑩）閩南系方言の-p、-t、-k、-2の共存する状態は、入声韻尾消失の過程のもっとも原始的（初期的）な状態であると推定できる。-p、-t、-k、-2を持っているのが、完全な整然とした形の入声韻尾ではないが、北宋の-t、-k共存或は、-p、-2の共存よりずっと完全であろう。こういうふうに考えると、閩南系方言のこの-p、-t、-k、-2の共存する状態が、北宋以前、もっとも正確に言えば、五代の状態に近いのではないか。これは、入声韻尾消失の過程において、-p、-t、-kが直接に、同時に、-2に変化しないで、きつと「共存」という状態を経過するからである。要するに、閩南系方言の入声韻尾が、唐宋五代の西北（北方）方言のそれと、やや共通の音韻的特色を持っていることが分る。この状態から考えて、閩南系方言は、唐宋五代に移入されたものと考えられよう。また、楊秀芳氏の研究によると、白話層の音韻体系が、大体一致して、共通に同じ一つの源（もと）を持っているから、この状態が、閩南地区に移入されてから、変化が起って成立するものではないと思う。つまり、この状態が、移入してから成立するとする

ならば、閩南系方言の次方言は、みな同じような変化をするはずがないと考えられよう。すなわち、移入した当時の閩南系方言（白話層）の入声韻尾が、-p、-t、-kの整然としたかたちを持っているものではないことは分る。要するに、閩南系方言の形成時期（或いは「移入時期」というと、やはり、入声韻尾の混乱した唐中期以後、或いは、五代の頃、閩南系方言が、移入され、形成されたと考えられる。故に、王育徳氏が、閩南系方言における入声韻尾のこの声門閉鎖音が、唐代に入「てからの西北系移民の伝えた新しい要素と考えたのは、自然な考え方だと言えようことが分る。

四、結 論

いわゆる新漢音とは、閩南系方言とが共に、中古中国西北方（北方）の言語系統に属していると考えられる。ここでは、両者における歴史的背景から考えよう。つまり、

一、時間的背景—ほぼ同じ唐代末五代に移入（伝承）されたもの

二、地理的背景—同じ中国の西北方（北方）から移入（伝承）されたもの

というようになった。このような歴史的背景において、両者における入声韻尾の状態が、同じ音韻的事実を持っていると考えられるのであろう。つまり、いわゆる新漢音の入声韻尾の区別の混乱状態が、閩南系方言と同じように、中国の唐宋五代頃の入声韻尾の状態を表わしていると考えられる。すなわち、入声韻尾消失の過程において、閩南系方言が、もっとも原始的（初期的）な状態を持っている。同じ時代の中国の西北方（北方）の方言音を反映したいわゆる新漢音は、その入声韻尾も、こういうような音韻事実を反映したものだ

思われる。だから、有坂氏の述べたような閩南系方言を、日本のいわゆる新漢音の音韻事実と同じようなものと見て考えるのは、間違っていると思う。有坂氏の述べた閩南系方言の入声韻尾は、この-p、-t、-kの共存することに注意を払わないで、ただ、そのひびきはよほど微弱なものであって、または、氏の観察では、台湾中部の人の発音だけで、丁氏によると、この-p、-t、-kの呼気は非常に微弱になるにも拘らず、有坂氏によると、-p、-t、-kの呼気は非常に微弱になっていて、よほど注意していないときとれない位であるとはしても、やはり外国人としてはつきりききとれる人もある。それは寺川喜四男である（補註）。これは観察した対象の差から生じたものであるうと思われる。だから、台湾人一般の入声韻尾は、現時点において、微弱であるといつて、きつとはつきりききとれるものであると言ふべきである。また、陳子博氏の述べたとおりに、台湾閩南語は50%のものの前後古代中国語における-p、-t、-kを保存している、残り50%のものは、或いは、声門閉鎖音に変化し或るいは他の韻尾と混同するなどして、区別の曖昧化する様相を見せているというようなものであつても、いわゆる新漢音の入声韻尾の区別の混乱状態という言語事実を論ずるには、やはり、同じ時代、同じ地区、同じ言語事実を持つているものを引いて論ずるのは、事実にあつて、ことができよう。つまり、現時点における音韻的变化から昔の歴史的言語事実を見て論じ、そして、同じものとするのは、あまりにも適当なものではないと思う。だから、陳子博氏の前掲論文の結論として、いわゆる新漢音と台湾閩南語の両者が、きわめて良く似た状態を呈してまた両者の符節を合わせたような姿は、偶然の所産とは見なし難く、明らかに、或る共通の音韻的事実を背景に持つものであると考へている。ということとは、間違ひではないが、残念なこと

に、「偶然の所産とは見なし難い」その理由は、現時点における音韻变化のために、共通の音韻的事実を持つてゐるものではない。これは、歴史的背景において、生じたものであることに解決ができたものである。つまり、偶然の所産ではないのである。すなわち、いわゆる新漢音が、閩南系方言の入声韻尾の-p、-t、-k、-2の共存する状態を持つてゐるのである。両者における入声韻尾の混乱も、この声門閉鎖音によつて生じた現象である。

いわゆる新漢音と閩南系方言が、同じ母胎の中古中国西北方（北方）音の系統を移入（伝承）したから、同じ音韻事実を持つてゐる入声韻尾のほかに、濁音声母の清音化、明母と微母の濁音化現象などから見れば、両者の関係も、もっと緊密であると考えられる。それにしても、両者における違いも見られよう。声調の面から見て、新漢音は6声調であるのに対して（注②を参照）閩南系方言はほとんど7声調である。（丁氏の前掲書を参照）これは、だいたい同じ系統の祖語から分れて以後それぞれに別々の歴史的変化をとげたものと考えられる。

いわゆる新漢音と閩南系方言との関係を論ずるには、いろいろな面から考えるべきではあるが、本論文は、入声韻尾から、両者の関係を論じたに限つてゐる。

注

① 奥村三雄氏『日本漢字音の体系』を参照。そして、奥村氏によれば、新漢音資料として、天台宗の法華經安樂行品、阿弥陀經などのほかに、真言宗の大般若經理趣品Ⅱ聖宝印（京都大学本、谷村本……）も、非常に参考になる。

② 奥村三雄氏『声明資料聖宝印理趣經について』（『国語国文』昭

和38年)によると、声調として、6声調だった可能性が強いようだが、尚、研究すべきもの。

③ 丁邦新氏『台灣語言源流』を参照。

④ 楊秀芳氏『閩南語文白系統的研究』をも参照。

⑤ 王育徳氏『台灣語概説』を参照。

⑥ 王育徳氏『中国文化叢書 ① 言語』を参照。

⑦ 森川久次郎氏が、『皇極經世』をもとにして、推定するものである。

⑧ 丁邦新氏の前掲書、また、鄭良偉氏『台灣福建話的語音結構及標音法』を参照。

⑨ この要素から成立した言語の層が、一番強い勢力を持っていて、前の言語層を覆って、また後になって外の言語勢力からあまり影響を与えられないのであろう。

⑩ 閩南系方言の「保守性」について、詳細は、王育徳氏『中国五大方言の分裂年代の言語年代学的試探』(p.92~p.93)また、王氏『中国の方言』をも参照。

⑪ これについて、-2が存在しないという論もあるが、ここでは、便宜上、潘重規、陳紹棠両氏『中國声韻学』の中に、-2が存在しているという論説をもととしている。

⑫ 高本漢氏著、趙元任氏、李方柱氏訳『中国音韻学研究』を参照。

⑬ 王育徳氏『中国文化叢書 ① 言語』によると、閩南地区に移住したのは、西北系移民である。一般に、「中原」「華北」から移住したと言うが、「中原」「華北」は、中国の西北方(或いは北方)を言うのである。

補注 寺川喜四男氏『台湾に於ける国語音韻論(音韻、音量篇)——外地に於ける国語発音の問題——』を参照。

《参考文献》

- 1 奥村三雄 「日本漢字音の体系」 訓点語と訓点資料第六輯 一九四六
- 2 陳子博 「台灣閩南語の研究——日本漢字音研究への展開——」 九州大学国語国文学会 一九七九
- 3 陳子博 「台灣閩南語の研究——日本漢字音研究之展開——」 華学月刊一二二期(台灣)一九八一
- 4 伊藤弥太郎 「漢音、吳音の研究試稿(承前)」 大東文化学報 5輯
- 5 王育徳 「中国の方言」(『中国文化叢書① 言語』 大修館書店 一九六七)
- 6 有坂秀世 「入声韻尾消失の過程」(『国語音韻史の研究』(増補新版) 三省堂 一九六九)
- 7 森川久次郎 「漢語の変遷——入声字の変遷を中心として」 アジア・アフリカ文化研究所研究年報 一九七八
- 8 水田紀久 「宋音般若心経」(『国語学』 国語学会編輯第48 武蔵野書院刊行)
- 9 寺川喜四男 「台湾に於ける国語音韻論(音質、音量篇)——外地に於ける国語発音の問題——」 台湾学芸社刊行 一九四一
- 10 村上嘉英 「現代閩南語辞典」 天理大学おやさと研究所 一九八一
- 11 王育徳 『台灣語入門』 日本東京一九七四
- 12 王育徳 『台灣語概説』 一九五七
- 13 山田孝雄 『国語の中に於ける漢語の研究』 宝文館出版 一九七八

14. 藤堂明保 『中国語音韻論—その歴史的研究』 光生館 一九八〇

15. 佐藤喜代治 『日本の漢語 その源流と変遷』 角川小辞典Ⅱ 28 角川書店 一九七九

16. 丁邦新 「閩語方言研究選目」 書目季刊第十一卷第二期 一九七七

17. 丁邦新 『台灣語言源流』 台灣學生書局印行 一九八〇

18. 董同龢 『漢語音韻學』 文史哲出版社 一九八〇

19. 潘重規、陳紹棠 『中国聲韻學』 東大圖書公司印行 一九七八

20. 羅常培 『唐五代西北方音』 國立中央研究院歷史語言研究所單刊甲種之十二 一九三三

21. 楊秀芳 『閩南語文白系統的研究』 (上、下) 國立台灣大學中國文學研究所博士論文 一九八二

22. 盧淑美 『台灣閩南語音韻研究』 文史哲出版社印行 一九七七

23. 中田祝夫 『日本の漢字』 日本語の世界 4 中央公論社 一九八二

24. 江文種 「閩南語小考」 大東文化大學紀要 人文科学 13

25. 慶谷壽信 「入声韻尾消失の過程についての一仮説—「蒙古字韻」からのアプローチ—」 名古屋大学文学部研究論集 XXXVII 一九六五

一九六五

26. 中嶋幹起 「福建語におけるいくつかの音声的特徴」 アジア、アフリカ言語文化研究所 4

27. 王育德 「中国五大方言の分裂年代の言語年代学的試探」 言語研究 38 一九六〇

28. 陳新雄 『中原音韻概要』 學海出版社印行 一九八〇

29. 王力 『漢語史稿』 (增訂本)

30. 鄭良偉 『台語與國語字音對應規律的研究』 台灣學生書局印行 一九七九

31. 鄭良偉、鄭謝淑娟 『台灣福建話的語音結構及標音法』 (再版修訂) 台灣學生書局印行 一九七八

32. 北京大學中國語言文學系語言學教研室 『漢語方音字匯』 一九五九

33. 薛鳳生 「論入聲字之演化規律」 (『屈萬里先生七秩榮慶論文集』 聯經出版事業公司印行 一九七八)

34. 張世祿 『中国音韻學史』 (上、下) 台灣商務印書館發行

35. 林尹著、林炯陽注釋 『修訂增註 中国聲韻學通論』 黎明文化事業公司 一九八二

36. 高本漢著 趙元任、李方桂合譯 『中國音韻學研究』 台灣商務印書館發行 一九七五

37. 羅常培 『廈門音系』 古亭書屋

38. 白滌洲 「北音入聲演變考」 女師大學術季刊 第二期

39. 董同龢、趙榮琅、藍亞秀 「記台灣的一種閩南語」 國立中央研究院歷史語言研究所單刊甲種 一九七八

40. 張世祿 「從日本譯音研究入聲韻尾的變化」 中山大學語言歷史研究所週刊 第九十九期 一九二九

41. 陸志韋 「釋中原音韻」 燕京學報第三十一期

42. 周祖謨 「宋代汴洛語音考」 輔仁學誌十二卷一、二合期 一九四三

43. 董同龢 「廈門方言的音韻」 (『慶祝趙元任先生六十五歲論文集』 國立中央研究院歷史語言研究所集刊第二十九本 一九五七)